

保険薬局における薬疹疑疹患者の検討

にいがた調剤薬局 / 渡部 陽子 水原郷病院 / 宇野 勝次

【目的】保険薬局における薬疹の管理について検討するために、皮疹を発現し、服薬中止により症状が改善した事例を解析した。

【対象】対象は2001年10月から2004年9月の3年間に、被疑薬剤が単剤で皮疹を発現し、中止により症状が改善した事例143件(全来局患者19,144名の0.75%)とした。男女比は、男性44件(全男性患者の0.50%)、女性99件(全女性患者の0.96%)であり、女性が有意に多い($p < 0.0005$, χ^2 -test)結果であった。また対象期間中の全来局患者の平均年齢は 56.3 ± 19.9 歳であるのに対し、皮疹発現患者は内服で 53.1 ± 21.0 歳、外用で 56.5 ± 19.0 歳であった。

【結果】皮疹の被疑薬剤は内服57件、外用86件であり、外用による発現が有意に多かった($p < 0.001$, χ^2 -test)。皮疹発現までの期間は内服が 33.3 ± 72.3 日、外用が 136.6 ± 253.3 日であり、外用が内服より有意に長い($p < 0.0005$, χ^2 -test)潜伏期間を示した。皮疹発現の薬効別頻度は、中枢神経用剤31.6%、抗生物質29.8%、代謝性薬剤とホルモン剤が各8.9%、漢方製剤7%、循環器用剤と抗アレルギー剤が各5.3%、その他3.5%であった。発現率は中枢神経用剤0.10%、抗生物質0.22%、代謝性薬剤0.06%、ホルモン剤0.22%、その他0.07%であり、抗生物質が中枢神経用剤、代謝性薬剤、その他を有意に上回った($p < 0.05$, χ^2 -test)。また抗生物質の発現率はセフェム系0.19%、ニューキノロン系0.49%、マクロライド系0.21%であり、中枢神経用剤の発現率は解熱鎮痛剤0.07%、抗てんかん剤1.26%、催眠鎮静剤0.16%、麻薬性鎮痛剤0.61%であった。さらに薬剤別の発現率は、スバルフロキサシ 66.7%、ケフィチニブ 12.5%、ロメフロキサシ 5.0%、ブシラミン 6.98%、プロピルチオウラシル 6.25%であった。内服薬の潜伏期間は抗生物質が 11.5 ± 16.3 日、中枢神経用剤 12.6 ± 14.2 日、ホルモン剤 56.4 ± 40.5 日、代謝性薬剤 30.2 ± 28.3 日、循環器用剤 120.0 ± 123.3 日、抗アレルギー剤 183.3 ± 257.8 日であり、抗生物質と中枢神経用剤がホルモン剤より有意に短かった($p < 0.01$, t-test)。皮疹を発現した外用剤の剤形は貼付剤73.3%、塗布剤17.4%、点眼剤5.8%、坐剤3.5%であり、薬効分類では消炎鎮痛剤67.4%、呼吸器用剤8.1%、抗生物質7.0%、副腎皮質ホルモン剤5.8%、その他11.6%であった。外用剤の中で貼付剤の皮疹発現率をみると、消炎鎮痛剤ではサリチル酸メチル製剤3.18%、ケプロフェン製剤2.71%、フェルビナク製剤1.63%、フルビプロフェン製剤2.0%、インドメタシン製剤0.85%であった。また同一成分であっても、MS 冷シブ®2.18%、MS 温シブ®5.36%、モーラステープ®4.38%、モーラス®1.53%、アドフィード®.47%、ヤクバン 20®4.44%、セボラス®3.57%、イドメソコワバ®0.65%、カレップ®20%というように、異なる発現率を示した。

【結語】外用薬による接触性皮膚炎が内服薬による皮疹より高頻度に発現する。潜伏期間は内服薬は短く、外用薬は多岐に渡る。内服薬による皮疹は抗生物質物と中枢神経用剤があわせて約60%と頻度が高い。外用薬ではであり、中でもサリチル酸メチル、ケプロフェンによる発現率が高い。

